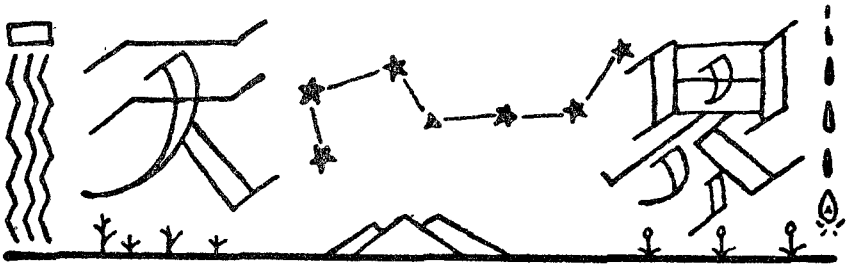
編輯　理學博士 山本一清　理學士 竹田新一郎　理學士 稻葉通義



第百六十一號　（第十四卷）　昭和九年九月

編輯室より

ポブロフニコフ博士の論文は，前號からの續きで，本號で終了してゐますが，之れは最近の小遊星や彗星に關する諸家の研究を大所高所から批判したもので，非常に興味深いものです．わが太陽系の成因や，運命などにも大切な暗示を與へるもので，必讀に値するものです．

能田理學士の支那天文學に關する文は，去る晩春の一日，同理學士が花山天文臺で講演されたもので，近頃珍らしいものです．支那古代の天文學は，是れわが日本人によつて研究開發すべきものですが，未だ此の方面は殆んど處女地です．漢文と支那語に堪能な篤學者の大に奮起すべき面白い問題が多くあるやうです．文献の調査なども未だ充分とは言へないやうです．

暫く延期されてゐた山本氏の天文用語に關する研究が又本號から出ます．山本氏に聞いて見ると，此の研究は，氏が十二ケ年來ひそかに考究に考究を積んで來られたもので，直接に天文關係の諸問題ばかりでなく，國語國文國字に關する極めて廣い方面にも論鋒を向けられるらしく，少くとも向後一ケ年ぐらゐは連續する論文らしいです．此の機會に，讀者諸方からの自由な意見も本誌に寄せられるやう，又，國内國外に此うした問題が大に論究せられるやう，希望します．

長く我が國の文教界に問題視されたロマ字問題も，最近の消息によれば，愈々「日本式ロマ字」が正式のものとして officially に採用されるやう決定されたらしいです．既に諸種の學界や，陸海軍方面でも日本式を用ゐてゐるのですし，鐵道其の他の交通關係でも，先年『左書きか，右書きか？』の問題で世間が騒い頃，既に日本式を採用のことが主腦部では決定してゐたそうですから，こうなるのも只「時」の問題だつたわけです．此の機に本誌でも，次號あたりから「ロマ字欄」を開設して，新式の此の國字により天文通俗講座を載せたい計畫です．擔當者は山本山村兩氏にきまりさうです．

九月は名月の月，土星を觀望すべき月です．其の意味で立派な月面圖を載せました．説明文はフランス語ですが，之れを切り拔いて，厚紙に張り，實地觀測の資料として下さい．（η）